

福島原発事故

福島県浜通り地域の人々に未曾有の避難生活を強いた東京電力福島第1原発事故から15年。時の経過とともに事故の記憶が薄れゆく中、神田外語大学(千葉市美浜区)の学生たちが、福島の「今」を世界へ届けるプロジェクトに挑んでいる。学生の感性でつづった日英2言語による新聞



の制作や、復興への願いを込めた特産品活用のビール開発など多角的なアプローチで、復興の「光と影」を発信した。プロジェクトを率いた同大外国語学部3年の関口椋久(りく)さん(21)は「言語を学ぶ私たちだからこそできる発信を続けていきたい」と決意を語った。(粕谷健翔)



瀬戸復興副大臣(右)に取引相手の関係者から、関口椋久(中央)らプロジェクトメンバーが、復興の現状について説明している。

神田外語大生プロジェクト

復興の「光と影」世界へ発信

私たちがだからできることを

日英2言語新聞 ■ビール開発

神田外語グループは2023年、福島県と包括連携協定を締結。同県大柴村に国際研修センター「フリティッシュヒルズ」を擁する縁もあり、同大では震災復興学習を教育の柱の一つに掲げている。

「自分ごと」に

プロジェクトの中心となったのはグローバルキャリアを学ぶ柴田真一特任教授のゼミに所属する3年生19人。柴田教授は、学生にとって震災は幼少期の遠い記憶。現地での対話を通じて、言葉にする重みを知り、課題を「自分ごと」にすることを狙ったと説明する。

昨年8月、学生たちは1泊2日の日程で浜通り地域を訪れ、同県大柴村に国際研修センター「フリティッシュヒルズ」や震災遺構の浪江町立語学小学校など当時の爪痕を今に伝える現場を視察。新産業創出の拠点である福島イノベーション・コースト構想の現場や、地元の特産品開発に取り組む人々へも取材した。浪江町の水産加工業・柴栄水産では、津波で全てを失いながらも地域住民の「また食べたい」という声に支えられ、約10年後に事業を再開した社長の歩みに耳を傾けた。取材を担当した関口舞矢さん(21)は「絶望的な状況からの感情の移り変わりを引



新聞とビールを瀬戸復興副大臣(前列左から3人目)に贈呈した神田外語大のゼミ生ら＝4日、東京都千代田区

き出せた。事前に食べた刺し身の感想を伝えるなど、寄り添う姿勢を意識した」と振り返る。制作された震災復興新聞「福島」とともに、表面が日本語版、裏面が英語版になっている。英語版の制作を率いたのは4月からカナダに留学予定の長田柚さん(21)。海外で原発事故の文脈に偏りがちな福島のイメージを、人々の暮らしやストーリーで伝えようとした。

海を越えて活動

情報発信の入り口を広げるための試みとして、福島県庄野町産のパナチを原材料に使用したオリジナルビール「福島ALE」を開発したほか、昨年10月の学園祭では、福島の物産を販売するブースを出店した。

活動は国内にとどまらず、海を越えて、プレゼンテーション班の大山奏太さん(21)は、インドネシアの学生に向け、英語でプロジェクトの成果を伝えた。「同じ地震大国として、災害からどう立ち直るかという経験を共有し、共感を得ることができた」と手紙を書いた。

福島県知事や復興副大臣への贈呈式を行い、プロジェクトは一つの節目を迎えた。同大キャンパスには、卒業生たちが約15年にわたって奮闘してきた福島の桜の木が並ぶ。ゼミ長の関口さんは「これからの福島へ関心を続けることが復興への第一歩になる」と話した。

